



理學者たる千里眼問題

理學博士 中村 清二

私は『理學者の見たる千里眼問題』と云ふ題で御話しやうと思ふ。『理學者』の前へ持つて行つて、日本語では要らない言葉ですが、若し之が英語であるならば、不定冠詞のAの字を附けて戴きたい。或一人の理學者が見た所の千里眼問題で即ち私一個の私見である。全體の理學者が、是から私が言ふやうなことを考へて居ると云ふのではないのである。千里眼問題の發端は随分古いことで、明治四十一年の七月頃に、熊本の御船千鶴子が、其義兄の清原氏の練習を受けて、透視の能力を得たと云ふことが發端である。此事が學者社會に紹介されたのは、其翌年即ち四十二年の五月で、熊本の齊々豊と云ふ中學校の校長の井芹と云ふ御方が、千鶴子に就て實驗せられたものを東京に持つて来て、福來博士に御示しになつた。其時に始めて東京の學者社會に知られた譯である。それから千里山の學者が此問題に關係して實驗をやるやうになり、又千里山の能力のある人も所々方々に現れて來た。後とから現れた中で有名なのは例の丸龜の長尾夫人、其外澤山あることは既に諸君の御存じの所である。そこで千里眼の初期には、唯だ透視をやる——物を透して視ると云ふことと、それから

遠方に在る所の物を視る、例へば何とか云ふ船が沈没したの、は、何所に在ると云ふやうなこと、即ち遙視であつたのが、段々進歩して、念寫と云ふやうな事が現れて來た。所が不幸にして肝腎の能力のある其御船千鶴子も長尾郁子夫人も、兩方とも飛んだことで亡くなられて、皆な大に落膽もし、又哀悼した次第である。そこで末社はまだ諸方にあるが、斯く二人の本尊様が亡くなつたから、世間の人が直ぐ忘れてしまふ。人の噂は七十五日と云ふけれども、長尾夫人の死んだのは二月廿七日で、まだ七十五日も経たぬのに、もう千里眼問題は半分以上忘れられて居る。忘れられて居るから黙つて居れば宜いの、私が此處に千里眼の御話をするのは、是は大に理由のあることである。實は今日のやうに七十五日位待つた上で御話をしたいと云ふことを——七十五日と云ふことは、私が千里眼で、長尾夫人が何目に亡くなると云ふことを知つて居つて、それから七十五日と前以て勘定したのではないので、山川博士杯の實驗のあつた正月の八日、先づ其邊から指を屈して、七十五日くらゐ経つた所で一つ御話をやつて見たいと云ふ考で初めから居つた。一體此千里眼の問題は、途

中で一寸休んだり何かしたが今度の事件の持上つたのは、昨年の暮あたりからである。其時分には諸方の新聞に——尤も新聞に依つていろ／＼説は違ふが——或新聞に依ると、私共は迂遠なる學者——對手にしても詰らぬやうな、極めて世事に疎い學者であると言はれて居つた。それから段々念寫杯が出來た時分に、矢張私共は餘程疑ふて居たから、今度は頑冥なる學者と云ふやうな譯になつた。それから近頃になつて、一つ話をしてみたいと思ふて或人に言つた所が、それは餘りしつこいではないか、斯う言はれた。初めは迂遠だと言はれ、中頃には頑冥だと言はれ、今は執拗と言はれる、極めてイヤな形容詞を帯びたもの、標本として、私が此處で話すのは甚だ心苦しいのである。それにも拘らず強いて御話をすゝるのは、私の方にも大に理由がある。近頃でも私の宅杯へ御出になるいろ／＼の御方の話を聴き、又世間一般の容子を探つて見ます所が、千里眼と云ふものは出來さうなものだ、千里眼の中でも、透視——物を透して視ると云ふことは可能である、と言ふ人が多い。念寫の方は是は餘りに不思議だ、精神の働で寫眞の種板に感ずると云ふことは、餘りに不思議である、と云ふことで疑つて居る人が多い。どういふ理由を以て透視を信ずるか云ふと、是等の人の説を聴いて見ると、それは自分が實驗をしたのでないから知らない、唯だ豪い人が信ずるからそれで自分も信ずるのだ——それはさうです。それより外には方法が無い。斯う云ふ問題に臨みては、信用のある人が是は出來さうな事だと言へば、さうかと言ふより外に仕方が無い。併ながら其信するといふことを言つて

居る學者が、どのくらゐの程度まで信じて居るか、それを調べて見るといふことが必要な事であらうと思ふ。信するにも信する程度がある、絶對的に信じて居るか、或は五分々々く信じて居るか、或は七分三分であるか、そこを一つ聽いて置く必要がある。疑ふ學者も無論ある、其疑ふ人は、どのくらゐの程度に於て疑つて居るか云ふことも考へて見なければならぬ。此兩方の説を聴いた上で、始めて我々は歸趣する所を知るのだ、どの人の説に従つて自分の説を定めたら宜いか、どうせ人の説に依つて自分の説を定めるのであるから、人の説を博く聞いて、さうして決定しなければならぬ。そこで私も同じく此千里眼問題に就ては、一度も實驗を行つたことは無いので、御船千鶴子の顔を見たことはない。東京へ來たときも私は會はぬ、私は全くの局外者である。其局外者が此問題に就て意見を定めやうと云ふときには、諸君と同じ様に、信する人と疑ふ人の兩方の説を聴いて見なければ、最後の考は定まらぬのである。然るに疑ふ方の學者の御説は、既に藤、藤原兩學士の實驗録が發行になつたからして、それを讀めば、どのくらゐの程度に於て疑つて居るか云ふことが分る。山川博士の説も私は親しく先生から聴取つたからして、どのくらゐの程度に於て疑つて居るか云ふことも存じて居る。然るに信すると云ふ方の側の御方、即ち京都に居る今村博士、東京に居る福來博士、此御兩人の實驗の結果はまだ發表されて居らぬ。千鶴子のズツと前の時代の事は哲學雜誌杯に出て居るけれども、近頃のは一向何處にも出て居らぬ。唯だ御婦人のお讀みにな

婦人界とか、女學世界とか云ふ雑誌に、千鶴子の最後の實驗杯と云ふやうな事でテラホラと出て居る計りで、學術的の報告は今日まで筆でも口でもして居られないのである。それでどの位の程度に於て御兩君が信じてをるか云ふことは、私共にはよく分らぬから、御目に掛りたいと云ふ望みを起して會見を申込んだ。又井上哲次郎博士も「東亞之光」其他所々で御話になる御容子を伺つて見ると、矢張信じて居ると云ふことであるから、先生の御説を聞いて置くことも、此際非常に有益な事であらうと思ひて、井上先生にもどうぞ御話を伺ひたいと云ふことを申出て、遂に先月の十四日と二十日と二度井上先生に御目に掛り、同じく廿二日に福來博士に御目に掛つて、御話を詳しく伺ふことが出来た。井上先生のは、初めに一遍話した事がまだ意を悉さないから、もう一遍來て呉れると云ふ御注文で出た。尚ほ先生の仰るには、私の意を取損つて居ては困ると云ふことで、今日此處へ出る二時間前に、井上先生から御手紙を戴いて居るから、先生の御説は丁度三度聞いたことになりす。福來博士には、其後今月の十六日に御目に掛り、それから今日此處へ出る四時間許りに、矢張御手紙を戴いたから、是も同じく三度と云ふことになる。私が井上先生や福來博士に會見を申込んだのは、實は二つの目的があつたのである。其目的の第一は、只今申した先生の御説を聴くと云ふことであるが、もう一つの目的は、藤原君杯の實驗の結果、其實驗録が出版になつてから、世間の人はどう言つて居るかといふと、彼丈ではまだ實驗が充分でない、もつと實驗を繼續してやるべきものである。

斯く改良せよと云ふことを申上げて助言をしたい。又物質派の者が斯う云ふ實驗をしたいと云ふときには、精神派の人が其參謀となつて、さう云ふ實驗の仕方では、生物を取扱ふに死物を取扱ふやうな遣方であるから、それでは向ふの精神状態を妨害して、其實驗の結果は當てにならないと忠告する。斯様にしてやつたならば、始めて満足なる結果が得られるであらうと思ふ。實驗繼續に關する此希望を述べることが私の第二の目的である。幸に此説は井上先生も福來博士も賛成で、時機があつたら一緒にやらうと云ふことに直ぐ纏つたのである。然るに不幸にして、肝腎の長尾夫人が白玉樓中の人となつた爲めに、遂に其目的を達することの出来なかつたのは、非常に残念の至りである。

一體私共が千里眼の實驗をやると云ふことに就ては、唯だ千里眼と云ふものが實際有るか無いかと云ふことを知れば、それが學問上非常に好い事であるので、千里眼と云ふ能力を有つて居る者が實際あつたからと云つて、何も是までの科學の根柢が壞れて、物質派の學問をして居る人が、周章狼狽すると云ふやうなことは毛頭無いのである。却て新しい発見の爲めに、新しい研究の方面が開拓せられたと云ふことを慶ぶのである。又其反對で、千里眼と云ふやうな能力は無い、彼は誤りである、詐欺をやつて居るのであると云ふことを、實驗の結果発見した所が、何も精神派の方の人で落膽することとは少しも無いのである。唯だ我々は虚心平氣で實驗を行つて、新しい智識を得て、其結果何か是まで知れなかつた現象を知ることが出来て、學問が進歩しなへすればそれで宜いのである。

理學者の見たる千里眼問題 (理學博士 中村清二)

る」と云ふ説が大分多いやうである。私もそれと同じ意見で、もう少しやらなければ眞偽を決定する譯に行かないと云ふことは一月十八日に報知新聞の記者が來宅のときに、實驗繼續と云ふものを述べて置いた。併ながら私の實驗繼續は、千里眼一般の實驗を繼續せよと云ふのではない、長尾夫人の問題——即ち一方では出来ないと言ひ、長尾夫人は短刀を持つて來ればやつて見せると言ふ水掛論——之を決定するには、もつと實驗をやらねばならぬと云ふのである。其實驗の遣方はどう云ふ風にしてやるかと云ふと、之には私の希望がある。其希望と云ふのは——心理學杯をやつて居る方、之を假りに精神派と名づけ、それから私共のやうな物理學杯をやつて居る方、之を假りに物質派と名づける——精神派の人と物質派の人と共同して實驗をやりたい、互に他を剷除して、我々計りでやる、お前等の出でる所でない」と云ふやうな態度で、別々になつて實驗をするのは好ましくないと云ふ意見である。何故かと云ふと、大層自慢話のやうであるけれども、實驗の方には既に就て種々考へて居ることは、精神派の人よりも、物質派の方が平生の練習が餘程積んで居る。實驗は、如何にして行ふべきものであるかと云ふ問題に就ては、物質派の人は餘程研究して居る。それ故精神派の人が斯う云ふやうな實驗を一つやつて見たいと云ひ出たときに、物質派の人が其參謀官となつて相談に與りたい、例へば一つの方法が申出された時に其方法では第三者即ち世間に向つて其實驗の結果を表すときに、其結果に就て充分の斷言をすることが出来ない、さう云ふ方法では、是々の抜かりがあつて可けないから、

である。

そこで今の方は直ぐ相談が纏つたが、先生方の説はどうだと云ふと、井上先生の千里眼に對する御意見は、透視の方は私が會つた時には、可能かも知れぬと云ふことであつた。今日二三時間前に戴いた手紙の中にあるのは如何か之が先生の一番新しい御意見です。之を此處で一す讀んで見ませう。其處で私信を發表することは、悪いかも知れぬけれども、併し私の考へでは、明々地に之を讀んだ方が、先生に向つてジャステスをするのである、どうぞ其點は私を咎めないで戴きたい、又先生に向つても、充分私は辯解の辭はあるつもりである。即ち其一節を見ると、

透視は西洋にてもある事にて必ずしも念寫の如く破天荒と云ふべき事に非ず予は實驗及び其他の事實に依りて透視は可能なるべしと信ず然れども尚ほ幾多の實驗を重ねざれば可能なりと斷言すること能はず、他人の實驗のみに依て論定すること能はざるは言ふまでもなし

至極穩健な議論である。それから念寫の方は先生が會見の時何う言はれたかといふと、念寫は信せぬと斷言した、此手紙にも其通り言はれて居る。

念寫は變態心理專門の福來博士によつて唱道せられしこと故能く其實如何を研究して之を確定するの必要ありと思惟せしまでに初めより之を信せしに非ず斯る破天荒の事實は他人の實驗のみに依りて斷定すること能はず幾度か自己自身の實驗を重ね始めて其事實如何を確定し得ることなり然るに予は自ら念寫の事實を實驗せしことなし故に信ず

ること能はず。福來博士はどうかと云ふと、博士は二月二十三日會見の時には透視の方は信する、其信するのには、自分が行つた實驗があるから信すると云ふのである。念寫はどうかと尋ねた所が、念寫の方は疑が四分で信仰と云ふか信用と云ふか、兎に角信する方が六分で、四分六分であると云ふことであつた。所が今日手紙で會見の時には少し間違ひがあつたかも知れぬと云ふことで改められた。私は物覚えが悪いので、間違がある可いから、實は其時に速記をさせて置いたのであるが、其速記にも四分六分と云ふことが書いてあり、私の耳にもさう云ふ風に聞えて居るに拘らず、只今の手紙には少し違つたやうに出て居る。

貴殿と會合の節小生の言ひ方が拙なりし爲め如何やうに御理解なされたるかや知れざるも小生の念寫問題に對する態度は右の通りに御承知被下度候。

其右の通りと云ふのは、小生は念寫問題に就ては何人が見ても疑ふべき餘地のなき程度まで實驗を遂行し能はざりし又藤君等の實驗中の出来事ありしによりて學者として公然主張し得る丈の材料を有せざるも個人としては信じ居り候。

と云ふことである。前に聞いたのと今日のは違ふけれども、先づさう云ふ譯である。

そこで透視の方であるが、透視はどう云ふ譯で井上先生は可能かも知れぬと言はれ、福來博士は信すると言はれるかといふと、それには理論上及び實驗上の理由がありませう。先

のである。京都の今村君はどう云ふことを云つて居るか、之を聞いて判斷したいと思つたが、何しろ遠方のことで手紙杯では兎角行違ひが起るから、會ふて聽きたいと云ふ考であつたがどうも仕方がない。私共に分つて居るのは、彼の科學世界と云ふ雑誌に『予の見たる千里眼』と云ふ諸方の學者に出した問に對しての今村博士の答が出て居る。其答は千里眼は誠に面白きものに候併し今の所ウソともスンとも申さず候。

斯う云ふのであるが、爾來香として聲なして、博士の考は私共には一向分らぬ。藤君と藤原君とが實驗録を著した時に、其本を今村君の所へ贈られて、それに手紙を附けて之を讀んで戴きたい、又御説も聽かして戴きたいと云つてやつた所が、其返事に、尙實驗繼續の考であると云ふことである。そしてあなた方がやつた様な實驗物を失念する様な周到なる注意は逆も企て及ばざる所であると云ふことであつた。それから復た藤君や藤原君が手紙を出されて、御考はどうだと云ふことを更に尋ねられた所が、二度目の御返事は、あなた方の本を讀んで見たけれども、あなたの方の本だけでは、彼能力を眞實ならずとは斷じ難い。自分ももう少し實驗をやるつもりであつた。斯う云ふことで御説は書いて無かつたさうである。

私か此事を聞き兩方の説を對照して、自分の意見を世間に發表したいと云ふ決心を致したのは、丁度二月の廿六日、元良勇次郎先生の所へ出まして、此問題は心理學に關係のある問題であるから、どうか心理學會で話をさせて戴きたいと

づどう云ふ實驗があるかと云ふと、福來博士の考では透視と云ふ事は御船千鶴子の方が非常に能力が優つて居る、長尾郁子の方は餘程劣つて居る、どう云ふ實驗があつて千鶴子の能力を信せらるゝかと云ふと、一番終りの十一月熊本へ行つてやつた時の實驗は斯う云ふ形式でやつた。今までは向ふ向きになつてやつたけれども、其時にはこちらの方に向いて相對してやつた。併ながら顔を見られると何となく氣耻かしいから、顔の所に幕を張つて手許の見えるやうにしてやつた。さうして骸子を二個入れてガラ／＼振つて中に在る骸子の目の中をさした、さうすると九遍實驗をやつた中で六遍だけ中の物が的中した。それからもう一つ信すべき實驗と云ふのは、自分で知らない活字を押してそれを封じて熊本へ持つて行つてやらせた、封筒の中へ入れたのは各々三字宛書いたのであるが、二度目の封筒の中へ入れたのは各々三字宛書いたものである。長尾夫人の方は是も的中した、之が信すべき理由のある實驗である。長尾夫人の方はさうは行かない、長尾夫人の方は透視の實驗で確かなのは一度しか無い。然も其一度も三字題を出した中で二字中つたのであつて、眞中の一字は偏だけ合ふて作は中らなかつた、澤山實驗をやつたが外のは皆な怪しい、此實驗は確かであると人の前へ出て言はれるのは、今の一つだけだと云ふ譯である。それから念寫の方はどうだと云ふと、是は井上先生はやらねないのであるから、福來博士に聞いて見たのである。念寫の澤山ある中で、其念寫が確に出来たと云ふのは是れこそタツタ一遍で、四角な物を寫したのが一つであると云ふことである。是丈の事を聞いて、實は私は驚いた

言つた、其翌日は長尾夫人の亡くなられた目で、其前日私が元良先生の所へ出た譯である。所がどうも都合が悪いと云ふやうなことで、丁酉倫理會で話をしてはどうかと云ふことであつたけれども、それは私の方で辭退した。更に心理學通俗講談會で話をしたいと云ふことを私の方から申込んだけれども、是も都合があつて斷られたのである。矢張り遠なる、頑冥なる、執拗など云ふことは、自分でも信じて居るので、宅へ歸つても實は肩身が狭いくらゐるのである。私の兄杯は、お前それをやつて何になる、憎まれるだけのことでないか。——成程さうであるが私は自分の考を述べたいのである。成るべくならば心理學者の御催しの會で、私の意見を發表させて戴くと云ふことが出来たならば、今後斯う云ふ場合に臨んで好い例を開くことであつて、公明正大の議論が出来来るであらうと思ふたけれども、不幸にして斷られたのである。

そこで一體透視と云ふ事及び念寫と云ふ事は、どういふ事だと云ふことを考へて見ると、透視は名の通り透して視るので、不透明な物の中へ何か入れて置いて、其中に入つて居る物を言ひ中てること云ふ事である。西洋にも同様の事があつて、佛蘭西語ではそれをクレールヴァイアンスと云ひ、獨逸語ではヘルゼーエシと云ひ、英語ではクリヤーアンスと云ふ。それで外國へ行つて見ると、寄席杯へ出て手品に之を澤山やる、私も今夜やつてお目に掛ける。併ながらよく御考を願ひたいのは、透視の手品を商賣にやつて居るから、それで此透視と云ふ事は、常に手品であると言つては大なる間違である、

或場合には眞實に透視があるのかも知れない。然し學術上の問題としては先づ手品に非ずと云ふことを證明する必要がある。それから念寫の方はどうであるかと云ふと、是は西洋にはまだ無いので、念力で以て——精神の働きで寫眞の板に或作用を起させるのである。従つて近頃日本で發明した言葉であるから、言海を引いても念寫杯と云ふ字は出て来ない、ウィブスターの辭書を探しても無いのである。私の拵へた念寫と云ふ英語は、サイコグラフィ（Psychography）と云ふのである。

さて透視及び念寫は事實であるかどうか、先づ透視の方から調べて見よう。先づ透視をやる時の形式を調べて見ると、それは二つの場合に別けて見ることが出来る。先づ透視をやる人と透視をやらせやうと思ふ實驗者がある、之を透視者と實驗者と名づける、此二人の外にも一つ第三者の居る場合と之の居らぬ場合がある。此第三者と云ふのは、どういふのであるかと云ふと、實驗を嚴重にする爲めに、自分が監督をしてやると云ふ人、或は其人の保護者、即ち御船千鶴子ならば義兄の清原氏と云ふやうなもの、或は其外の人で何とか彼とか適當な名目のある人、總て之を第三者、立會人と名づけませう、此第三者は公然と知れて居ることもあらうし、又全く黒幕で影に潜んで居ることもありませう。兎に角此第三者のある場合と無い場合と此二つに大別する。そこで立會人の居る場合にはどう云ふ事があるか。實驗をやりに行く人は、是は自分が眞か偽かと云ふことを探さうと思ふで行くのであるから、是は清淨潔白な人間で、其人を疑ふと話

が出来なくなつてしまふ。そこで跡へ残るのは透視をやる人間と立會人の人間、之が兩方とも悪意を持つて居る、さうして出来るやうな振りをして、實は外の事をやつて居る、第一が斯う云ふ場合で、それをやる時にどうするかと云ふと、例へば字を書く時に立會人の方で見居つて之を合圖で以て透視者に教へる。或は中にある實驗物を取り出して見て知らぬ顔をして教へる、つまり立會人が實驗をやる。是は手品——詐欺で、私は手品師でござると云つてやるなら詐欺ではないが、私は透視をするものである、精神上の不思議な能力を具備したものであると云つてやれば、詐欺——罪人——である。それから立會人のある場合の第二は、透視をする方の人は善意を持つて居る、立會人が悪意を持つて居る、即ち黒幕が居つて、其黒幕計りが實驗をやるのである。斯う云ふ場合には、どんな事をやるかと云ふと、こんな風な事があり得るかと思ふ位、即ち黒幕の人が透視をやる人に催眠術を掛けて、さうして催眠状態に於ける人に合圖をして、自分が斯うやつたら斯う云ふ事だといふことを教へて、それをさせて、事が済んでしまつて普通の状態になると、スツカリ忘れさしてしまふ、一體催眠状態では暗示の與へ方で泥棒もやれば殺人もやると云ふことであるから、さう云ふやうに催眠状態から戻つて普通の状態になつた時に、透視をやつた人は、何も悪いことをしたとは思はない。それから第三の場合には、透視をやる人も立會をする人も、少しも悪い考の無い善意を持つて居る場合である、けれども其善意を持つて居る人が二人居ると、其間に不知不識合圖が出来ると云ふことになるのである、此第三

の場合に於ける例は、獨逸にあつたハンスと云ふ馬の例である。是は興行をする馬で、此馬を舞臺へ出して乗算の問題を出すと、馬が乗算をやつて數を答へる、例へば二に三を乗すると云ふと馬が足で六つ叩く、四から三を引くと云ふと一つコツンとやる。如何にも不思議だと云ふので調べて見ると、此馬がコツン／＼とやるのは之は平生から教へてあるのです。それで馬の持主が馬の側に居ると、馬は持主の顔をよく注意して見て居る、それで答が三と云ふ時には馬が何も知らずにコツン、又コツンとやる、さうして次の三となると持主が今だと思ふから無意識に顔の筋肉が動く、それを馬の先生鋭敏であるからチラと見て、もう次のコツンとやるのを止めてしまふ。是は馬の持主も馬の方も善意で、馬が詐欺しやうとは思つて居ない、それでも知れるのである。それから又斯う云ふ事があるかも知れない、是は一つの想像説であるが、透視をやる人が不思議な精神能力を有つて居つて、其立會人の心を讀む、所謂テレパシー以心傳心で、心から心へ感じが來ると云ふのである。是も悪意は一つも無い、中にある物を立會人が知つて居るものですから、それがどうかして透視者に知れる、斯う云ふことがあるかも知れぬ。尤もテレパシーは全く想像で之を信ぜざる心理學者が多い。私は唯かも知れぬと云ふ計りです。

此三つの場合を除いて、尙包みの中の文字なり物體なりが知れる場合に、眞の透視と云ふことが始めて云へるのである。眞の透視と云ふのは、立會人の考を讀むのでもなし、合圖を受けるのでもなし、眞に不透明な物を透して視るのぞなけれ

ば透視ではない、今度は立會人、第三者の無い場合で、實驗をする人と透視をする人と二人掛向でやつたらどうだらうと云ふと、矢張り色々な場合がある。第一は透視をする人に悪意がある、例へば封を切つて開けて見る、即ち手品を遣ふ、斯う云ふやうなのが第一、其次にはさう云ふ悪意は無いのであるが、丁度前に述べたやうな場合に、テレパシー傳心か何かで、實驗者は自分が題に何を出したと云ふことを知つて居るものですから、其心を透視者が讀んでしまふと云ふやうなことがあるかも知れない。さうでない場合に眞の透視が行はれるのだ。

是丈の事を考へて透視の實驗をやるには、どうしたら宜いかと云ふ私の條件は第一に立會人を謝絶する、是は私の今まで言つたことで明かでありませう。立會人が一人でも多ければ、多いほど藝がし易い、手品がやりよい、それであるから立會人は一切斷りて、透視をする人と私と二人限りと云ふ條件にした。それから第二には透視に出す問題は私も亦何人も全く知らない問題を出す、私が或は第三者が知つて居ると先刻の傳心とか何とか云ふことで、私の心を讀まれるかも知れない、かも知れないです、此「かも知れない」疑はしい事の這入つて居る實驗の方法は、極めて拙な實驗法である、その無いやうにするには、私の知らない物、誰人も知らない物が實驗の題にならなければならぬ。誰も知らない物と云ふのは何だといふと、例へば骰子をやつて見るのが宜い。器物の中へ骰子を入れて、之をガラ／＼振つて上にある目を透視させる。尤も骰子に細工がしてあつて、六なら六が上へ

出ることがあるから、假子も吟味しなければならぬが、假子の目が何であるかは誰も知らぬからテレビジョンではない。實驗に假子を使用することは實は吾々が申出したので斯ふ云ふ意味があるのだ。田中館博士の案はもつと簡單である、茶碗に燐寸を三本入れて蓋をしてガラ／＼振つて出す、さうして燐寸三本がどう云ふ形になつて居るかを透視させて見る。是は極めて良い方法で誰も知らない。實驗はさう云ふ意味のある實驗でなければ何の役に立たぬ。それから第三には或は私の顔付か何かを見ると可くないから、私の注文は暗室でやりたいて云ふのです。是は濟々賢の井芹さんが東京へ出られた時に私が申し出した、暗室で千鶴子と私と二人きりで實驗をさせて下さいと云つた。さうすると冷かす人があつた。それから此處にお在の狩野亨吉博士はもつと奇抜の案を持つて居る、實驗して欲しくば裸體で来い——是も面白い。今度は念寫はどうだと云ふと、念寫も實驗をするのが矢張り難かしい。疑つて見ると、第一は封を開いて、何か光に感ずるやうなことをさせる。第二には封を開かないで何か細工をする、封を開かないでやると云ふことは、ラジウム杯を使ふと云ふやうなことである。ラジウムが九龍に有るか無いかと云ふことは、大分世間の人が問題にして居るが、是は馬鹿な話で、有るか無いか分らないけれども、萬一あると可くないから、その疑の這入り得ないやうな方法で實驗をせねばならぬのである。第三には既に拵へて置いた光に感ずるやうに出来て居る物と摺換へてしまふ。種板を取換へてしまふ。こつちから持つて行つた種板を向ふへ取つて、さうしてへい

やりましたと云つて、チャンと準備して置いたのを出すかも知れない。此三つの事をやらないうで、さう云ふ疑の無い時に現像して見て、寫眞の板に感ずるやうなことがあつたならば其時に始めて眞の念寫と云ふことが考へられる。だから念寫の實驗を厳密にやらうと云ふにはどうすれば宜いかと云ふと種板を充分監督して始めから終りまで決して封を開かれる心配もなく、摺換へられる心配もないやうにすることが必要である。其意味に於て藤、藤原君等のやつた所の、種板に先方に知れない印を付けて置くこととは、極めて良い方法である。と考へる。

一體此千里眼のやうな新しい問題に臨んだ時には、どうやれば一番満足な結果を得られるだらうかと云ふことを一般に申上げる。新しい問題に遭遇した時には先づ事實であるかないかを調べる必要のあることは言ふまでもないことである。又さう云ふ新しい事の起つた時には、論理上少しも不都合な事は無いかと云ふことを考へなければならぬ。場合に依つては、事實の方が先に見付かつて、理論が後から出て来ることもある。其後から出て来た理論が、是まで我々が有つて居る所の智識と今度出て来た事との關係が、少しも矛盾衝突する所が無いやうに出来る、さう云ふ時ならば都合が好い。又或場合には理論の方が先に出て、後から其事實を見付け出すと云ふこともある。此場合に於ても矢張り理論と實驗とが、是まで我々の知つて居る智識と旨く合つて少しも矛盾する所の無いやうなことになるのである。さうなれば我々も安心出来る。

千里眼問題は事實が理論に先立つのであることは極めて明白であるから、其研究の方針は第一に事實であるかないかと云ふことを調べるに在る。切て世の諺に論より證據と云ふこととがある。之れは詰らない議論をして居るよりも早く證據を出してしまへ、さうすると事が早く落着くと云ふのである。千里眼問題も其通りで、眞だ偽だ何だ彼だと言つて居るよりも、事實此通り出来ると言つて證據を見せると、其方が早く結局が付くのである。けれども私の考へでは唯だ千里眼が出来ると云ふ證據が擧つたからと云つて、へい宜いと云つては可くない——どこまでも疑深いですな。京都の桑木博士は、近頃或雑誌に「證據より論」といふことを言ひ出した。論より證據をひつくりかへして「證據より論」、是は餘程面白い事で、非常に味つて見なければならぬ言葉である。假令證據が擧つても論が旨く合はない時には、其證據と云ふものは何所かに怪しい所があるかも知れない。其實驗がまだ何所かに抜かりがあつて、それは證據にはならないと云ふことを示すのである。論の合はない證據は可くない。論より證據と證據より論と両面から見ても夫が合へばそれで宜しい。一體證據と證據と云つて證據呼ばれをするが、我々が目で見たこと、手に觸れたことが、必ず的になるだらうか。それに就て茲に面白い話がある。先頃亡くなられた中村秋香先生の遺著を令息中村文學士から戴いた。其中に名無草と云ふ隨筆のやうなものがあつて、それに根岸守信の語と云ふのがある。根岸守信と云ふ人が馬に乗つて友人と一緒に北豊島郡でしたかへ行つた所が遽かにえらい夕立がやつて来て、雷がおどろ／＼と鳴り

出した。けれども馬が逸物であるから、盛んに其雷雨の中を駆抜けやうとした所が、直ぐ近所であらうのがビシヤリとやつたので、馬は驚いて近所の百姓家の中へ駆込んだ。馬も馬主も主ですから、守信は直ぐ百姓家の中から飛出して友人の跡を追掛けて行つた。然るに其翌日になると江戸中大評判で豊島郡の何所かで以て昨日雷が落ちたさうな。不思議な事は、通常の雷は四つ足であつて木を攀ちて天へ昇るのに、昨日のは雷神が馬に乗つた儘で民家に落ちた！ どうでせう、其時に人の見たのは確かです、馬は眞實の馬で、乗つて居たのは根岸守信なるものであつたから、けれどもそこに一寸の間違ひがある、即ち雷神だと云つたのは悪かつた。だから見た事必ずしも直ちに證據にならない。今のは戲言のやうに聞えるが、極く眞面目なる學問上の議論としても見た事が必ずしも證據にならぬと云ふ例をもう一つ擧げやう。夫れは顯微鏡で細かい物を見る場合で、顯微鏡で見得る物體の大きさには極度がある。光の波の長さが非常に小さいものであるが、光の波の長さ位の小さな物體を顯微鏡で見やうと思ふと、見た形と實物とは一致せぬ事がある。餘程注意せぬと飛んでもない間違になる。顯微鏡の實驗に使ふブローイングマ、アングラムと云ふ小さな動物があるが、之を顯微鏡で見ると、其器械の倍率によつて其組織が三角に見えたり、或は六角に見えたりする。三角に見える顯微鏡で見た時は三角に見えただけれども、其實三角ではない、故に見た物必ずしも證據にはならない。

又其反對で、見ない事でも信すべき事は世の中に澤山ある。

是は例を擧げるまでもないが、地球は今日では固形體になつて居るけれども、大昔には溶けて居たといふことを地質學者が言ふ。誰人も地球の溶けて居たのを見たものは無いけれども、是は信すべき理由がある。詰り證據よりも論で、チヤンと地球の過去の歴史は溶けて居たといふ理由があるからである。又裁判官が罪人を調べる時に、罪人が斯々の罪を犯したと云ふことを白状する。併ながら罪人が自白したからと云つて、輒くそれを信じてはならぬと云ふことは、裁判の方をやつて居る人の始終注意する所ださうである。或は豫審か何かの時に餘り苦められるから、一寸逃れに虚を言ふことがあるが、私の言ふのはそれではない。罪人が確かに是々の罪を犯したと信じて云ふ時でも、尙容易く之を信じてはならぬ。何か罪人が思ひ違ひをして居るかも知れぬ、丁度先刻の馬に乗つた雷のやうなことがあるかも知れない。そこまで注意しない、裁判官は眞の職責を盡したものと云ふことは出来ぬ。

そこで我々が新しい現象に臨んだ時には、充分それを疑つて、愈々疑の無いと云ふ所に至つた時に、始めて斯の如き新しい事があると云ふことを斷言し得るので、論の合はないやうな證據を持出して、それで新しい現象があるかと云ふことを言つては相成らぬのである。一體實驗に臨む時にはどう云ふ態度でやつたら宜いかと云ふと、意味のある實驗をやらなければならぬ。向ふで手品をして居るかどうかと云ふ疑がある場合に、向ふの注文は斯々であるからと云つて、唯だハイ／＼と言つて、向ふの條件通りの實驗を何百遍繰返して

ら、是は餘程確かである、尙此他に開封したらしい形跡が幾度もあるから、益々左様信ぜしめる。併し一體物理學者が此千里眼の問題をやると云ふことは、どちらかと云ふと、商賣違ひの事をやるので非常に難かしい。初めから難かしい難かしいと云ふことを繰返して言つて居るが實際難かしい。井上先生の所へ出て、私が實驗繼續のことを申出した時にも言つたことであるが、透視をやる人の精神状態を亂さないやうにしてやると云ふ條件があるから、是は大層難かしいのである。向ふの精神状態が亂れて居る時に實驗をやつて、其結果不可能と云ふことになつたからと云つて、直ちに透視は詐欺であると云つては可けない。條件は十分容れてやらなければならぬ。さうして置いて詐欺をして居るはせぬか、或は眞であるかといふことを判定しなければならぬのであるから、大層事が難かしくなつて来る。若し我々に刑事調査の權能を與へて呉れたならば、是は餘程簡單になる。怪しいものがあつたらイキナリ開けて見ても宜いと云ふ權能を持つて居たならば實驗が輒すくなる。然かし刑事調査のするやうな態度を執れと我々に強ひられたならば、其は私共の敢てしない事で、御斷り申し度い。若し私が今後實驗をするやうなことがあつても、刑事調査の眞似は私はしたくない、刑事調査の眞似をしないで眞偽を見付けると云ふことをやりたい。此處が餘程苦心を要する所である。藤、藤原君の實驗録の中に、穴があるといふことを書いてあると、それを怪いと思ふならば、何故戸棚を開けて見ないか、と斯う云ふことを言ふ人があるが、荷も紳士と云ふことを標榜して實驗に臨んだ人が、斷りな

理學者の見たる千里眼問題 (理學博士 中村清二)

やつて見た所が、眞偽の判斷は出来ないものである。百遍やつた實驗の中で九十遍中つて居るから、是は確かであると云ふ報告をする人があるけれども、それは大なる間違であつて、度數でさう云ふことを極められるものではない。事情の許す限り變化を與へて、意味のある實驗をやらなければならぬ。意味のある實驗を一つやらうとして、それが半分しか出来なくても、其半分の方が意味の無い實驗百よりも遙に得る所があるのである。此點に於いて私は山川先生と藤、藤原君のやつた所の「健」の字の實驗は非常に大切なものであると思ふ。彼の諸氏は斯う云ふ所の意味のある實驗を爲された。靴へ封をするにはどう云ふ風に封をする、中へ鉛の十文字を入れるのは何の爲めに入れると云ふやうな一々意味のあることをやつた。所が手落があつて中に種板が這入つて居らなかつた爲めに念寫の實驗は出来なかつた。念寫の實驗は出来ぬけれども、大切な結果を得て居る。即ち開封されたといふ證據が立派に擧つて居る。靴の合せ目の所にして置いた所の煙は消えた、紙も切斷せられて居る。函の外へ置いたのが中へ這入つて文字は位置を變じて居る。函の外へ置いたのが中へ這入つて居つた。それから其時に長尾夫人は透視をやつた、其透視の結果も亦確に是は開封して内容を知つて之を語つたのであると云ふことを示すやうな透視である。即ち目前に出してある所の状態を云つたのではなくして、玄關の次の間の六疊に置いた時の有様を透視したのである。是は私は開封したものゝと斷言して宜しからうと思ふ。開封したかしないかと云ふことを見る目的で實驗をやつて、さう云ふ風になつたのであるか

しに他人の家へ行つて主人に斷りなしに戸棚を開けて見ることが出来やうか。隣の室が怪しいと云ふ時に、無斷で隣の室を開けて宜しいだらうか。是は我々には出来ない事である。それをしないで實驗をしやうと云ふのですから、非常に事が難かしいのである。

そこで實驗した事はどう云ふことがあるかと云ふと、是は非常に澤山あるから、先づ透視の方の實驗の大體を述べると今村君と福來君が、四十三年の二月から五月に亘つて澤山の實驗をやつて居る、其報告は哲學雜誌にも出て居るし、大阪の朝日新聞にも出て居る。其時の今村君の結論は「御船千鶴子の能力は極めて不思議なものである、之を説明するには我々の五官以外に第六官があると云つて説明するより外に方法はない」と、斯う云ふやうなことを言はれて居る。それから福來君は、千鶴子と云ふものは誠に不思議な能力を有つて居るものであるから、是は國寶である、國の寶であるとして言つて居られる。私は國寶と云ふ物は、もう少し重い物と思つて居る。諸方に繪だの彫刻だの金で拵へたりした物に國寶と云ふのがある。成程木で拵へた物や金で拵へた物よりは、生きて居る人間の方が遙か大切であるけれども、御船千鶴子が今の實驗の結果國寶であるといふことになると、私は異論を申したい。國寶と云ふのは外に類と眞似の無い之が失くなつては大變だ、之を外國へ取られては大變だと云ふやうな、誰の目で見ても寶であるといふことが承認されるものでなければならぬ。千鶴子の能力が偉大であつたと云ふことは、福來博士は信じて居られたかも知れぬけれども世人一般

は之を認めて居らぬ、是は頗る怪しいことで、之をしも國寶と云ひ得るならば、私はもつと豪い國寶です、今後もつと優待して貰ひたい。

それから其後の實驗は、千鶴子が東京へ来ていろ／＼の人が實驗をやつた、さうすると大橋邸でどうも鉛管を摺換へたらしいやうなことがあつた。山川先生の作られた實驗物は何所かへ姿を収めて、別の鉛管が飛出して、千鶴子は其中の物を透視して居る、之に就て今村博士や丘博士は女性であるから深く咎めるに足らぬ、或は彼に花を持たせたのであると云ふやうなことを言はれて居るが、それは日常の交際の上に於ては言ふべき言葉かも知れぬけれども、今新しい千里眼があるか無いかと云ふ學問上の問題に於て、さう云ふことを言ふべき筈ではない。山川先生の鉛管が何處へ行つたのでせう、此事を福來君に尋ねた。さうすると福來君の答には、彼の鉛管は翌日自分が千鶴子を責めた所が出した、出したからそれを山川さんの所へ持つて行つて返した、山川さんが其顛末を世間に報告せられるであらうから、それで事済みだ」と云ふ話である。けれども大橋邸に於て其鉛管の摺換があつた時に當時如何なる事情であつたかと云ふことを聞いて見ると、千鶴子は數度問はれても、之が山川博士の實驗物だと云ふたから、田中館先生は非常に強硬な態度を執られて、一つ身體検査をやつて見やう、帶の間からでも山川さんの出て来るかも知れぬと云ふ考であつたさうである、所が不幸にして他から電話が掛つて歸られた爲めに、そんなことにもならず済んだのであるさうです。今後も斯う云ふ事が復た出て来る

見ると云ふことであつた。そこで種板を現像して見ると光を引いて居る、十文字の形がチャンと出た。岡田校長の家へ残して置いた種板の方は現像したけれども何等の影響が無かつた。私が今惡意に之を解釋すると、此聯絡と云ふのは誠に旨い言葉である。玄關へ持つて來て實驗物を同時に三つ四つ一緒に或物の中へ入れて置いたから、目の前で實驗に提供された物が、此中のどれを出したか分らない、だから聯絡したと云ふて皆答へる。今の寫眞の種板が光を引いて居つたと云ふから、是は開けたと見る方が至當である。開けて見た所が實驗物が澤山這入つて居つて、實驗に供せられたのは其中のどれかわからぬ。だから聯絡して居ると皆言つたと考へられる。

もう一つ三浦君の報告の中にあるが、菊池文學士のやられた實驗ださうで、黄色い繪の具で、草と云ふ字を書き、青い繪の具で『〇』と『川』と云ふ字を書いて透視の實驗に出した所が『〇』と『川』は中つたけれども『草』と云ふ字は見落して氣が付かない。詰り問題は三つ出したのであるけれども、其中の二つしか無いやうに思ふて答へたらしい。そこで實驗の時刻を調べて見ると夜の七時—ようございますか七時頃ランプの光で黄色い文字を白い紙へ書いたのは、咄嗟の間には之を見落す、さう解釋した方が私は宜からうと思ふ。

それから山川先生が實驗をやられた時には、袖で書く所を隠して『十』の字と『心』の字と『乍』と云ふ字を書いたのが上の方だけ中つた。それから袖でかくさずに、公明正大

理學者の見たる千里眼問題 (理學博士 中村清二)

こともあらうから、我々はさう云ふ實驗に臨んだ時には、女性であるからと云ふやうな考、或は子供であるからと云ふやうな考で、見過してはならないと思ふ。尙ほ千鶴子の方の實驗は、福來君が昨年の十一月熊本へ行つてやつたと云ふのがあるが、是は女學世界及び婦女界に出て居るから略する。

それから京都の三浦君がやつた透視の實驗の中に、一つ御話をしたい事がある。此人は十一月十九日から二十三日に亘つて實驗をしたのであるが、其時に面白い事がある。是は三浦君が京都の『藝文』へ書いて出してあるから、それを讀んで下されば分るのであるが、氏は或實驗物を出した。其實驗物と云ふのは、水筆に水を着けてさうして紙に字を書いた、水で書いたから乾くと痕が残らない、それを透視に出した。さうすると白紙であるから何も無いと答へた、それは的中した。併し此白い物の外に何か字が見えると云ふ話である、長尾夫人はそれに對して聯絡と云ふ言葉を遣ふ、どうも玄關と聯絡があつて誠に困る、玄關の次の六疊間に實驗物を四つばかり置いてあるが、其實驗物が現はれて來て困ると言つた。又それと同時に、鉛の十文字を寫眞の種板の上へ載せて、さうしてそれを實驗に出した。是は其鉛の十文字を透視して貰ひたいと云ふ譯である。何故種板を置いたかと云ふと、或は開封するかも知れない、開封した時は寫眞の種板を現像して見れば感光して居るから分るので種板を置いて見た。又同じ實驗物を岡田と云ふ女學校の校長の家へも置いて見て比較に供した。其時に長尾夫人の答には十文字も見えないが、尙聯絡が起つて漢字を三つ上へ上へと重ねて書いたものが聯絡して

に書いたのはよく中つたと云ふことである。今度は井上先生の實驗。是はまだ何處へも發表されて居らぬから聽いて戴きたい。井上先生が丸龜へ行かれた時に實驗を爲さつた。其井上先生の御話に依ると、藤君は彼の穴が怪しいと言つて居るが、彼の穴よりもつと不思議なものは其文字を書く所の六疊間の直ぐ脇の所に三尺の襖の開戸がある。其開戸が立付が大層悪くて、柱と襖との間が隙いて居る。そこで井上先生は怪しいと思はれて、丁度其時分に長尾家の人が不在であつたから、其三尺の開戸を開けて隣の室へ這入つて、隙間から机の所を覗いて見た。所が机の上が大層よく見える、だから節穴を怪むよりも、寧ろ此隙間の方を怪めと云ふことである。それから藤君等の本には此六疊の隣の茶の間は間取不明と書いてあるが、井上先生の御話では此茶間の神統一をやる爲めの準備として嗽をやるのに、此茶の間と中庭を隔て、相對して居る三疊間の縁側に出てやる、それで廻るからして節穴から書く所を覗いて見てそれから何處かを廻つて奥へ知らせるよりも、此の奥の隙間から書くのを見て居つてさうして此腰障子を透して何か書いたものを見せるかどうかすれば、もつと斬すい交通の方法であるとの事である。併ながら先生は、實際さうしたとは仰らないのである、唯左様も考へられると云ふ計りで、私がそんなことを言つて先生を誣ひては申譯がないから、間違のないやうに願ふ。そこで井上先生が實驗をせられた時には、例の六疊の机の上で以て『天成美』と書いた、所が先生の御話には「其書いた時に

隣の室で摩擦音を聞いた、其摩擦音は今尚ほ耳底に残つて居る。私は「摩擦音とはドンナ音であるか」と尋ねたら、先生は卓子掛を袖でこすつて此様な音であると云はれた。そこで私は前に先生の仰つたことを綜合すると、一寸長尾家を疑ひたくなる。兎に角此「天成美」は中つた、そこで今度は東京から持つて行かれた物を出して、是非是をやれと云ふと、初めは断わられたさうであるが、天成美の中つた勢に乗じて強ひられたので、やることになつた。是は函に這入つた物である。透視の結果是は名刺が這入つて居ると答へた。名刺はどう云ふ風になつて這入つて居る、何かで包んであるか裸であるか」と問ふと「蓋のあるものに入れてある、さうして其名刺には文字が五文字書いてある、けれども何の文字であるかと云ふことは透視することが出来ない、斯う云ふことである。そこで早速それを開けて見た所が、中から飛んでもない物が飛んで出た。護謄球が飛んで出た。其護謄球はナイフで一寸切つて、そこをギョツと押すと口が開く、其口の開いた所へ名刺を押込んだのださうです。名刺の這入つて居ると云ふことは中つたのです。けれども護謄球は蓋がある物とは云へない。それから名刺の文字の数はどうであるかと云ふと違つて居る、是は九龜の警察署長の名刺で、姓名は四字、肩書に小さな文字で十一字あるので、總計十五文字であつて、的中して居らぬと言ふことであつた。

是丈の事を全體綜合して見ると、兎に角疑はしい事がどこにでもある。誰がやつた實驗にでも疑はしい事がある。其疑はしいと言ふのは、どう云ふ意味で疑はしいと言ふかと申

らして、寫眞の板に段々精神作用があるものだと言ふやうな事になつたさうである。私の斯う云ふ場合に臨んでの結論は是とは違つて、一體寫眞の種板を使用した理由は、開封したかしないかを見分ける目的でやつたのであるから、寫眞の板に感じて居つたならば開封したらしいと考へべきで、もう少し其方面の研究を續けて行くべきであると思ふが、今村福來兩君等は其方面には進行せずして、違つた方面に向つて進出した、即ち精神作用で感じたと言ふことで、念寫と云ふやうな方面へ進んで行つた。さうして段々其實驗が進んで「心」と云ふ字が寫り「○」が寫り「天照」と云ふ字が寫るといふやうな正合になつたのである。

以上は實驗の結果であるが、證據より論であるから、一體透視が出来る言ふやうな理論があるかと云ふと、よく世間の人が直ぐ催眠術といふことを言ふ。私も催眠術といふことを言つた。そこで催眠術といふ事と透視といふ事と關係があるかどうかと云ふことに就て、最初井上先生にお目に掛つた時に問題を出して見た。さうすると先生の御答には「どうも催眠術と透視とは關係があるらしい。自分が九龜へ行つて長尾夫人の話を聞いて見ると、彼の女は觀音様を信仰する、其觀音を念する極度に達すると、大層心持がよくなつて、丁度それは透視をやるときに精神統一が出来たと同じ状態である」と云ふ、是は確かに自己催眠である、斯う云ふ話である。つまり自己催眠なり、或は他人から催眠術を掛けられたのなり、兎に角催眠術と透視とは關係があるらしいと言ふのである。そこで私は井上先生に「催眠術に掛けられて、さうして

すと、的中しない場合が澤山あつたから、それで疑はしいと言ふのではない。百遍やつて見た所がタツタ三遍しか中らないから、此透視の効力が疑はしいと言ふのではない。割合で云ふと中々よく中つて居る、初め今村君のやつたのは九割方中つて居る、中つて居る度数は非常に多いのである。疑はしいと言ふのは、時々開封した形跡があつたり、摺換へたりする形跡があるからである。私は是丈の事を全體見ると、透視は疑はしいものであると云ふ斷定をした。

それから念寫はどうであるか、念寫の抑もの始まりは、今村博士が熊本と九龜とへ寫眞の種板へ黒い文字を書いたのを送つて、之を透視して呉れろと言つてやつた。何故種板へ書いたかと云ふと之ならば開封したら直ぐ知れる、之を開くと光に感ずるから、現像して見れば分ると云ふことでやつた。又三浦君が九龜でやつた實驗では、先刻述べた通り、鉛の十字架の形が現像したら出て來た。さう云ふやうな所からして寫眞の種板と、透視をする人間との間に、何か不思議な作用があるらしいと云ふやうな譯になつたさうである。福來君が菊池文學士に依頼してやらした實驗にも、少し形式が違ふが同様なことがある。寫眞の種板の上に文字を寫してまだ現像しない種板を先方へ送つて透視させた、詰り先刻申した水筆で字を書いたのを透視しろと云ふやうなものである。所が透視は出来たけれども現像して見た所が種板が眞黒になつたと云ふことである。實はもう少し精しく述べないと分りにくいけれども、餘り長くなるから略するが、そんなことか

催眠状態に入つて居る人の前に實驗物を提供したときに、どうして中の物を言ひ中てる事が出来るのであるか、此御説を聴きたいと言ふと、それは催眠術と云ふものは、いろいろ不思議な事をやるものである、或は硬直状態になつて手が動かなくなつたり、或は腕は何か及物で傷を付けても一向感ぜないと云ふやうなことをやる。そこで私は「催眠術は隨分不思議な事をやる、透視と云ふ事は不思議である、故に三段論法を用ひて、催眠術をやれば透視が出来ると云ふやうなことを云はれるのでありませうか」と聞いた。少し冷かしのやうな、誠に失禮な態度であつたが、さう云ふことを言つた。所が先生幸にお叱りもなく、それは他に理由がある、それは潜在意識——隠れて居る所の意識によるのである」と申された。

潜在意識と云ふのは心理學の本を御覧になると説明してあることで、殊に福來君の御専門の變態心理學の方に出來るのである。其潜在意識と云ふ事はどういふ事であるかと云ふと、我々が平生斯う云ふ状態に於て意識して居る外に、我々の知らない隠れて居る所の意識と云ふものがもう一つある、之を潜在意識と申すのである。實は私は心理學の「シ」の字も知らなかつたのですが、斯う云ふことを言ふやうになると、少しは心理學を噛じらなければならぬ、そこで勉強した。福來君の本も讀んだし、それから西洋の本も時日の許す限り一生懸命讀んだ、それを此處で請賣をする。我々は始終請賣をして居るから請賣をする。扱て潜在意識があることになる、普通の我々の意識を取去つた所の人格と云ふものがある

一つあることになる。之は即ち福來君の本で謂ふ所の第二人格である。只今私がこんなことを喋舌つて居るのは第一人格で、此外に第二の人間が居る、獨立の第二人格があるのである——此様なことを云ひ出したのはハルトマンであつて、今より四十年許り前に出版された本の中で斯う云ふことを述べて居る。

「吾人は斯の如く世間的にして又陋劣なる斯くの如く非詩的にして又非靈的な心を有するを見て失望すると勿れ。吾人の中には一驚くべき不可思議なる或者潜めり。吾人は其存在を知らざれども吾人が日々のパンを得んとして醒る間に此或者は夢見つゝあり祈りつゝあるなり」と述べて居る。此説を正しいとすれば當世向の御婦人方に失禮なことを言ふか知れませぬが、一言申して見たい。新教育を受けた御婦人方が、理想の夫を得られないで煩悶して居られるときには、斯う云ふことを考へるとよい。自分は飛んだものと結婚した、我夫は日々離れとして平凡なことをやつて居る、私が董や蝶々の話をしても一向感じが無い、アつまらぬ」と歎息する代りに、「ナ、彼は我夫の第一人格である彼れに隠れたる麗はしき第二人格あり」と思つてやつて下さればよい、さうすると家内圓滿である。兎に角さう云ふ潜在意識と云ふものがあると心理學者は説いて居る、尤も人によりて多少の違ひがあつて、潜在意識と云ふ語に三つ四つ異なるつた意味があるけれども、扱て井上先生の御説では催眠術で此普通の意識を取り去つた所謂無我の状態なるものに達し得られると云ふことである。さうすると私の次の問題は「然らば

あつた。兎に角理論上透視と云ふ事が出来さうだといふ、深い根據は井上先生には無いのである。即ち實驗をやつて見て實驗の結果、出来れば透視が出来ると云ふことになるので、井上先生の御考は、私の考へて居ることと全く符合するのである。

福來博士に理論が有るか無いかと云ふことを、私の方からいろいろ問を出して尋ねたが、結局之も「實驗をやつた上で事實と云ふことが極つてから後に始めて説明を付けべきものであつて、私には理論は無い」と云ふことであつた。さうすると福來君のも理論無しである。然らば先刻の御手紙には透視は信ずると云ふやうなものであるが、其透視を信する福來君の實驗は、千鶴子の方には十一月に行はれたのが少しはあるが、長尾夫人にはタツタ一つしか無いのである。念寫を信すると云ふことは、先には四分六分と云ふ風に聴いたけれども、今度は内心では確信すると云ふことであるが、之を信する實驗は四角の念寫タツタ一つしか無いのである。

そこで私は前述したやうに、只今まで我國に出て来た千里眼と云ふものは、信すべき理由無しと云ふことに致したい。福來君は、四角なもの確かである、初めから終りまで監督を怠らなかつたと云はれるけれども、充分に調べて見なければ分らない話である。前後のいろいろの事情を綜合して、私は我邦の千里眼は信すべき理由無しといふことを言ひたいのである。

少しく餘論として附加へて置きたいことは、斯う云ふ千里眼と云ふやうな問題は、風教上に非常に大なる影響がある。

催眠術と云ふものは、潜在意識計りの無我の状態を捨へる方便に過ぎない。無我の状態に於て透視と云ふ事が出来るならば、潜在意識と云ふ事が透視の原因であつて、催眠術と云ふものは方法に過ぎない。願くは此方法を考へないことにして無我の状態に在る所の人の前へ透視物を提供した時に、どうして透視が出来ませうかと先生に尋ねると、先生は「もう一つある、それは意志本位論で、シヨッペンハウエルが唱へた所の、總ての物に意志があると云ふことである」との御答へである。成程我々人間には何かしたい、物が食ひたい、之を是非見たいと云ふ意志があることは明であるが、植物にも意志があると云へば言へないことはない。例へば植物生理學の方で云ふと、植物の根は暗い方へ向いて行き、葉は明るい方へ向いて行く、或は根は重力の向う方、即ち下へ下へ張つて行くと云ふことがある。是は植物に意志があつて、明い方へ行きたいと云ふ意志で明い方へ行き、養分を取らうと云ふ意志で養分のある方へ根が張つて行くと云へば、云つて云はれないことはない。さう云ふ意味に於て意志は何にでもあると云ふことは考へ得らるゝ。そこで井上先生の説では「無我状態になりました時に、其人が意志を有つて居る、是非此中にある所の物を見たいと云ふ意志があれば透視が出来る、尤もそれが餘程強くなくては見えない、斯う云ふ御説である。そこで私が伺ひたい、伺つた——又只今受取つた所の御手紙にも書いてあるが——此潜在意識意志本位の論は先生の假定説で、未だ定説といふほどのことに無之候」と云ふとで、會見の時には餘り具體的の深い考はないと云ふことで

千里眼をやると試験の問題の透視が出来ると云ふやうなことがあつた、そこで眞面目に勉強をするよりも、透視を習ひに行方方が早いと云ふ若者が出来るかも知れぬ。さうすると又學校の先生の方でも、試験をしないので、直ぐ生徒の精神を看破つて點數を付けると云ふことになる。是は一見戲言のやうであるが、私は餘程眞面目に考へなければならぬ事と思ふ。話が横へ外れるが、エスペラントと云ふ萬國共通の言葉があつて、頻りに之を唱へる人がある。之に就ても私は同様のことを言つて見たい。英語や何かをコッ／＼習ふよりも、エスペラント語を習つた方が早手廻しである、當世向きであると云ふやうな考で、眞面目な學校の課程を怠つて、エスペラント語に熱中した結果何事が起るか。エスペラント語の特點は其文法の簡單なものと、其語が歐羅巴の現代語を集めて出来て居ると云ふのに在る。故に歐羅巴人に向つては、成程非常に都合の好いもので、新しい他の歐羅巴の言葉を覚えるよりは非常に便利である。然かし外國語を一つも知らぬ我青年が、エスペラント語を學ぶと言葉が全部新しい却々の勢力を要する。同じ骨折をするなら矢張エスペラントよりは英語が獨逸語の方がよい。千里眼問題と云ふやうなものは、世間の人が非常に之を歡迎する。此處に千里眼問題の切抜があるが、此切抜は所謂「京大光線」なるものが三浦君に依つて出されたときからの切抜であるが、御覽の如く大冊三冊に涉つて居る。何しろ是丈のものになると云ふことは、世人の注意を惹き、思想界の上に多少の波瀾を起したと云ふことは確かである。此思想界の上に起した波瀾が、此儘で鎮つてしまひませうか

或は何か影響を残しはしまいか——私は残すと思ふ。世間の人が念寫は出来ぬだらうが、透視は可能だといふやうなことを言つて居るのは、非常に悲しむべき事である。信すべからざる事を信じて居るのである。斯う云ふ事を世人が歓迎する根本は何所にあるかと考へて見ると、私は世間の人が秩序を立てたことをやつて居るのはまどろつかしいから、所謂六ヶ月英語速成とか或は幾何學難問解法とか云ふものによつて、語學や數學を修めた方が早手廻しである、入學試験さへ出来れば宜いと云ふやうな考をもつて居るからであると思ふ。此の如き風潮が、若い人は勿論のこと、其他の人の間にも段々彌蔓して來るのは、我々日本人の美風が段々無くなつて行くことと云ふことの證據の一つだらうと思ふ。人生不可解杯といふことを若い者が生意氣に言ひ出して、華嚴龍へ行く杯といふことは以ての外の事である。人生解すべきか解すべからざるかと云ふ事は、白髪の高になつても決して解す事ではない。若い者の癖にそんな生意氣なことを言ふのは間違つて居る。是は皆秩序を立て、ミツシリと、一歩々々確かな道を履んで修養をやらないう結果であらうと私は考へる。華を捨て實に就くと云ふことが勅語に見える、が、私は世間の人が早く結果を得たいとアセル爲めに、皆間違つた事を好む様になる、透視や透視を欲する様になると思ふ。若し私の言つたことが輕卒であるならば偏にお説を致すけれども、私には私の自信がある。若し私の言ふことに、少しでも理があると思召すなれば透視可能と云ふことの考は一掃して戴きたいのである。又學者に向つて「汝の周圍には新日本の國民たること

を忘るゝ勿れ」と申して置きたい。之が私の希望で、迂遠なる、頑冥なる、執拗なるものが此處に切言する所以である。
(四十四年三月廿一日夜開演第七回學術講話會にて講演)
附言 講演後念寫の寫眞を一々幻燈にて映出して示し、又透視の作品を二種行ひたり。尙ほ藤、藤原兩理學士の千里眼實驗録及び學藝雜誌五月號所載の福來博士と余の會見談を参照せられんことを乞ふ。

西洋の千里眼的研究熱

◎今日文明國人を以て自任する歐米諸國人の中に於ても、奇蹟的、妖怪的の信仰が大に廣まつて居るやうだ。是は單に愚夫愚婦のことのみならず、隨分教育ある階級にまでも波及して居るやうである。是等の人々はまさか狐や狸に憑據されるなどのことは勿論信する譯もないが、幽霊との交通とか、千里眼とか云ふ現象に就ては、立派な學者が熱心に研究して居るやうである。千里眼とか念寫とかは我國でも一時大流行を極めたものだが、歐米でも千里眼の現象は、故ケンブリッヂ大學教授ヘンリー・シヂェウウィック。此人は哲學者である。又最近に長逝した心理學者哲學者であるウィルリアム・セームスの如き、就中文學の天才と稱せられて居つたフレデリック・マイヤーズの如きは、其の美しきパーナサスを棄て、二十餘年の長年月を極めて幼稚なる斯學の開拓に従事したのであるが、其結果「人格及び其の死後の存続」と題する大著述を公にしたが、是れは學界の爲めに少なからぬ貢獻をしたと云はねばならぬ。又研究の對象となつたものの中、有名なものは、西洋の千里眼とも云ふべき米國のバイバ夫人であるが、此夫人は能く人の過去の出來事を語り、又遠視も遣はる死人の靈と交通することと出來ると云ふので、遠く英國まで渡つて心象研究協會で實驗をやつたが、能く適中したと云ふことである。又伊太利のユーサビヤ、パラダノカと云ふ人は、觸れず文字を書くとか、事物を動かすとか或は位置を變ずると云ふことで至る處に成功して有名となつたが、ケンブリッヂの實驗に於て其欺瞞的舉動を摘發せられ、研究の對象とせぬと云ふことになつた。けれども大陸の學者は些少の詐欺的手段は難しも、其能力は眞正のものであると云つて居るさうだ。科學萬能主義を以て凡てを解決せんとするは如何なものか知らぬが、大に研究すべきであらうと思ふ。

太平洋問題

法學博士 寺尾亨君談

世界の大問題

太平洋問題は二十世紀に於ける世界の大問題である。殊に太平洋上に國を建てたる我々日本帝國にありては、本問題の解決如何は直ちにこれ國家興敗の岐る處である。故に本問題の研究、解決のためには、舉國一致其全力を盡さなければならぬと思ふ。近時我一部有志者により本問題を研究するために組織せられた會が二つある。一は即ち太平洋協會で、他の一は即ち太平洋會である。私は雙方共に關係して居るが、就中深く關係して居るのは後者即ち太平洋會の方である。而して太平洋會の研究範圍は頗る廣汎で凡そ太平洋の水の環流を通ずる處の大陸及び島嶼を悉く包含して居るのである。

友人戸水博士の如きは範圍擴大論者の最たるもので、烏拉山までを其研究範圍に入れやうと言つた程である。故に本會は單に對米問題を研究、解決せんが爲めに起つた會でもなければ、又對清問題を研究、解決せんが爲めに起つた會でもない。對米問題可なり、對清問題可なり、對南問題亦可なりである。併し差當り孰れの問題が最も重大緊切なりやと言へば、無論對米問題であるから、本會の力は自から其大部分を之が研究解決のために注がれることと思ふ。さう乍ら本會の趣旨の存する處は決して米國に對抗する方策を研究すると云ふが如き偏狹のものではないので、之よりも更に一層雄大にして且公明なる目的を有するものである。而して對米問題と共に、我外交上及び國際貿易上、最も重大の關係あるは對清問題であるから、本會は又之が研究、解決

決つたために多くの力を注ぐつもりである。更に之に牽連しては南洋方面までも研究すべき筈であるが、先づ差し當りは、やはり對米、對清の二大問題を中心として研究を積むこととなるであらう。要するに我々太平洋會は極めて其研究範圍を廣くし、極めて公明正大の方法で以て之が解決に力を盡さんと欲するものである。而して吾人の考ふる處によれば、我々日本帝國が太平洋問題解決の主動者となることは、實に其權利であり、又責任であると思ふ。苟くも我國にして此天職を盡すことを怠らんか、これ即ち自から好んで、衰退の運命を招致するものである。故に我國民たるものは、在朝の士たるのと在野の人たるのとを問はず、又其政治家たるのと學者たるのと、軍人たるのと、實業家たるのとを問はず、舉つて本問題の研究解決のために全力を盡されたいものである。